

そ の 他

# オーストラリアの教育サポートシステム

## － クイーンズランド大学の事例 －

佐々木 長 市\*

2005年9月末から2ヶ月ほどオーストラリアのクイーンズランド大学において研修し、教育制度や学生へのサポートシステムを調査する機会が与えられた。教育はその国の歴史や文化的な背景のもとに醸成されているので、短期間で真相あるいは核心に迫れるとは思えないが、何かしらの参考となればと、拙速にその概要報告をしたいと思う。

訪問先のオーストラリアは人口約2000万の多民族国家である。歴史的にはイギリスの影響が強く、教育制度はイギリス型の考えが踏襲されていると聞く。実際、卒業式の様式はハリーポッターに出てくるような黒いマントを卒業生から教員まで着用して行われていた。日本の20倍の国土に日本の人口の1/6と少ないので、住宅や大学の敷地面積は日本に比べかなりゆったいりしている。

クイーンズランド大学は、1910年に州内にはじめて設立された大学で100年弱の歴史を持つ大学である。校舎は3箇所に分かれているが、中心校は州都ブリスベン市の中心部のブリスベン川の右岸に位置している。構内には、大きな池があり朱鷺などの水鳥や野生の七面鳥が巣づくりしている光景が見られる良好な環境である。中心校はSt.Lucia キャンパスである。敷地約140haに約3万人学生が学んでいる。文学部、工学部、農学部や医学部など7学部をよする総合大学である。大学は、オーストラリア全体で37校、進学率も約20%という現状である。留学生も多く、最近是中近東のイスラム諸国の留学生が増え、構内にはこれに対応したイスラムコーナーが開設され、メッカの方向をしめす標識が印象的であった。大学は、ノーベル賞受賞者を卒業生に輩出するなど、世界の大学ランキングで約60位、遺伝子の研究分野は世界の最高峰であるという話であった。

オーストラリアの教育制度は、日本とかなり相違して驚いた。6歳で小学校に入学し17歳で高校を卒業し、大学は20歳で終了するという教育制度であった。大学は、教養課程がないため3年で専門を修了するので、学生が若く日本の高校生のように感じられた。高校からの入試は、州内の統一試験(8月頃に実施)と高校の成績で総合評価がなされ、この結果で希望大学に応募し、入学が決められるということであった。驚いたことに、この入学の選考には、大学の教員は無関係で州の教育庁の関係者と高校の関係者だけで合否が決められということだった。さらに、学生は希望大学を5 - 6校まで申請できるというのである。大学の教員に入試業務がなくなったらどれほど良いかと羨ましく思った。しかし、大学はオープンキャンパス等を実施し、学生の獲得と大学のアピールに余念がないということであった。

学生は2月に入学し、3年後の12月に卒業という形で進級する。入学当初は、学部ごとにオリエンテーションが実施され、この内容でさらに選択する教育コースが詳細に決まる。このような説明会が7日ほどあり、履修の科目や卒業までのスケジュールが決まる。2学期制であるが、11月末から2月上旬は夏学期(日本とは逆)と称し、補講的な講義が実施されてもいる。学生は、講義の中味で先生と話す以外は教員からのサポートはない。卒論は成績優秀者にものみ許されるので、成績不良者にはこの機会はほとんど与えられないという。成績は7段階評価で、平均約6以上の学生がオナーズというコースに進み

\* 弘前大学農学生命科学部

Faculty of Agriculture and Life Science, Hirosaki University

日本で言う卒論を実施する。大学院も成績上位の者のみが進学が許されるので進学者数はおのずと制限されることになる。

学生のサポートは、学生サービスという部署で専門の職員が対応している。ここのスタッフ（約40名）が健康面からレポートの書き方、宿の世話、留学生の入学から卒業までのアドバイス、就職関係までを指導している。従って、ここの職員はレベルが高く、博士号を取得している方が多いということであった。話を聞いた職員はポーランド出身で、職員もいろいろな国から採用されているということであった。学生には自主性を求めている、学内にいろいろなサービスのパンフレットやインターネットでのサービスの提示がなされているのみであった（国の違いか）。知り合いの学科長に聞いたら、本人が戸をたたかないとだれもなにもしてくれないということであった。学生も、精神的に異常を感じ始めたら、参考とすべきパンフレットを読み自ら判断し、精神関係のカウンセラー職員にメールで予約を取り、カウンセリングを受ける。就職でも、求人の書類は、学内の求人コーナーにあるがこれも自分で、適性検査等を実施し、自分にあった適切な職業等を決める。これのアドバイスは職員がするという形である。レポートのよりよい書き方、アルバイトで忙しい学生のために時間の有効な使い方のアドバイスをするなど、日本とは異なる学生サポートの仕方も見られた。自立的に学生がこの制度を取り入れていることに日本との相違を痛感した。就職では、年一度国内の会社に大学にきてもらい求人説明を受ける機会を設けていた。最近の求人側の動向について紹介する会を持つなどいろいろな工夫がなされているようであった。学生は、日本のように教員と飲む機会は少なく、少し寂しそうであるという意見も聞いたが、学生同士はよく飲んだり遊んだり忙しいようであった。成績不良者には、学部により除籍や成績不良の通知を郵送しているということであった。これは、日本で言う学生部というような部署で学科長などと話し合い、機械的に行っているということであった。

今回の調査は、極めて優秀な学生が集まり、かつ全体で3.8万人という学生をかかえる大学の効率的運営にもとづく、学生サービスのあり方を垣間見たように感じている。学生のサポートのあり方もかなり異なりあまり参考にならならない点もあるが、入試業務や学生のサービス環境の相違を考えると、日本の大学教員は良くやっているのではと思われる。最後に、このような機会を与えていただいた大学関係者に感謝申し上げます。

〔註：平成17年度弘前大学教育の国際化推進プログラム（海外派遣成果報告書）〕